

有島武郎全集

第二卷

大正十三年四月廿五日印刷
大正十三年五月五日發行

(非賣品)

著者 有島武郎

發行人 足助素一
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

第二卷
印刷人 島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三秀舍
東京市神田區美土代町二丁目一番地

發行所

叢文閣

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

電話 牛込二五七三番
振替口座東京四二八八九番

有島武郎全集 第二卷

目次

お末の死	一
フランセスの顔	三三
クロボトキンの印象	五三
潮霧 ^{ガス}	六三
『松虫』の序と跋	七一
自我の考察	七七
聖書の權威	八九
ミレー禮讃	九一
死と其前後	一二七

目次

二

藝術製作の解放	二〇五
平凡人の手紙	二一一
『平凡人の手紙』に就て	二二九
カインの末裔	二三三
クララの出家	二八五
實驗室	三〇九
私の母	三三五
云ひたい事二つ	三三七
藝術を生む胎	三四一
凱旋	三五三
奇蹟の詛	三六七
四つの事	三九一
岩野泡鳴氏に	三九五
迷路	四〇一
小さき者へ	五八三

動かぬ時計	五九九
藝術家を造るものは所謂實生活に非ず	六一五
死を畏れぬ男	六二一
想片	六四一
林檎の野	六四七

口 畫

風景（一九一六年作）	（卷頭）
------------	------

お末の死

一

お末はその頃誰れから習ひ覺えたともなく、不景氣と云ふ言葉云ひくした。

「何しろ不景氣だから、兄さんも困つてゐるんだよ。おまけに四月から九月までにお葬式を四つも出したんだもの」

お末は朋輩にこんな物の言ひ方をした。十四の小娘の云ひ草としては、小ましくやゝ居るけれども、假面かめんに似た平べつたい、而して少し中のしやくれた顔を見ると、側で聞いてゐる人は思はずほゝゑませられてしまつた。

お末には不景氣と云ふ言葉の意味は、固よりはつきりは判つて居なかつた。唯その界限では、誰れでも顔さへ合はせれば、さう挨拶しあふので、お末にもそんな事を云ふのが時宜になつた事のやうに思ひなされてゐたのだつた。尤もこの頃は、あのこつくと丹念に働く兄の鶴吉の顔にも快からぬ黒ずんだ影が浮んだ。それが晩飯の後までも取れずにこびりついて居る事があるし、流し元で働く母がてつくひ（魚の名）のあらを側にどけたのを、黒にやるんだなと思つてゐると又考へ直したらしく、それを一緒に鍋に入れて煮てしまふのを見た事もあつ

た。さう云ふ時にお末は何んだか淋しいやうな、後から追ひ迫るものでもあるやうな氣持にはなつた。なつたけれども、それと不景氣としつかり結び附ける程の痛ましさは、まだ持つてゐよう筈がない。

お末の家で四月から追つかけ／＼死に續いた人達の眞先きに立つたのは、長病らひをした父だつた。一年半も半身不隨になつて、どつと臥せつたなりであつたから、小さな床屋の世帯としては手にあまる重荷だつた。長命をさせたいのは山々だけれども、齡も齡だし、あの體では所在もないし、手と云つてはねつから届かないんだから、あゝして生きてゐるのが却つて因業だと、兄は來る客ごとにお世辭の一つのやうに云ひ慣はして居た。極く一克な質で尊大で家一杯ひろがつて我儘を通して居た習慣が、病みついてからは更に募つて、家のものに一日三界あたり散らすので、末の弟の哲と云ふのなぞは、何時ぞや母の云つた惡口をそのまゝに、父の面前で「やい父つちやんの鼻つまみ」とからかつたりした。病人はそれを聞くと病氣も忘れて床の上で跳り上つた。果てはその荒んだ氣分が家中に傳はつて、互に睨み合ふやうな一日が過ごされたりした。それでも父が居なくなると、家の中は楔がゆるんだやうになつた。どうかして思ひ切り引きちぎつてやりたいやうな、氣をいら／＼させる喘息の聲も無くなつて見るとお末には物足りなかつた。父の背中をもう一度さすつてやりたかつた。大地こそ雪解の惡路なれ、からつと晴れ渡つた青空は、氣持よくぬくまつて、いくつかの風が窓のやうにあちこちに簾められて居る或る日の午後に、父の死骸は小さな店先から擔ぎ出された。

その次ぎに亡くなつたのは二番目の兄だつた。ひねくれる事さへ出來ない位、氣も體も力もない十九になる若

者で、お末にはこの兄が家に居る時と居ない時とが判らない位だつた。遊び過ぎたりして小言を待ち設けながら敷居を跨ぐ時などには殊に、誰れと誰れとが家に居て、どう云ふ風に坐つて居ると云ふ事すら眼に見えるやうに判つて居たけれども、この兄だけは居るやら居ないやら見當がつかなかつた。又この兄の居る事は何んの足しにも邪魔にもならなかつた。誰れか一寸まづい顔でもすると、自分の事のやうにこの兄は座を外つして、姿を隠してしまつた。それが脚氣を煩つて、二週間程の間に眼もふさがる位の水腫れがして、心臓癱瘓で誰れも知らない内に亡くなつて居た。この弱々しい兄がこんなに肥つて死ぬと云ふ事が、お末には可なり滑稽に思はれた。而してお末は平氣でその翌日から例の不景氣を云ひふらして歩いた。それは北海道にも珍らしく五月雨じみた長雨がじとくと薄ら寒く降り續いた六月半ばの事だつた。

二

八月も半ば過ぎと云ふ頃になつて、急に暑氣が北國を襲つて來た。お末の店もさすがにいくらか景氣づいて來た。朝早く隣りの風呂屋で風呂の栓を打ちこむ音も乾いた響きをたてて、人々の軟らかな夢をゆり動かした。晴天五日を打つと云ふ東京相撲の畫びらの眼ざましさは、お末はじめ近所合璧の少年少女の小さな眼を驚かした。札幌座からは菊五郎一座のびらが來るし、活動寫眞の廣告は壁も狭しと店先に張りならべられた。父が死んでから、兄は兄だけの才覺をして店の體裁を變へて見たりした。而してお末の非常な誇りとして、表戸が青いペンキ

で塗り代へられ、球ボヤに鶴床と赤く書いた軒ランプが看版の前に吊つるされた。おまけに電燈がひかれたので、お末が嫌つたランプ掃除と云ふ役目は煙のやうに消えて無くなつた。その代り今年からは張り物と云ふ新しい仕事が増へられるやうになつたが、お末は唯もう眼前の變化を喜んで、張り物がどうあらうと構はなかつた。

「家では電燈をひいたんだよ、そりや明るいよ、掃除もいらなんだよ」

さう云つて小娘の間に鐵棒かんぼうを引いて歩いた。

お末の眼には父が死んでから兄が急にえらくなつたやうに見えた。店をペンキで塗つたのも電燈をひいたのも兄だと思ふと、お末は如何にも頼もしいものと思つた。近所に住む或る大工に片づいて、可愛い、二つになる赤坊をもつた一番の姉が作つてよこした毛繻子の襷をきりつとかけて、兄は實體な小柄な體をまめ／＼しく動かして働いた。兄弟の誰れにも似ず、まる／＼と肥つた十二になるお末の弟の力三は、高い齒の足駄を器用に履いて、お客のふけを落したり頭を分けたりした。客足も夏に向くと段々繁くなつて来る。夜も晩くまで店は賑はつて、笑ひ聲や將棋をうつ音が更けてまで聞こえた。兄は何處までも理髪師らしくない、おぼこな態度で客あしらひをした。それが却つて客をよろこばせた。

斯う華やか立つた一家の中で何時までもくすぶり返つてゐるのは母一人だつた。夫に先まづき立たれるまでは、口小言一つ云はず、はき／＼と立ち働いて、病人が何か口やかましく註文事をした時でも、黙つたまゝでおいそれと手取早く用事を足してやつたが、夫はそれをを餘り喜ぶ風は見えなかつた。却つて病死した息子なぞから介抱を

受けるのを楽しんで居る様子だつた。この女には何處か冷たい所があつたせぬか、暖かい氣分を持つた人を、行火でも親しむやうに親しむらしく見えた。まる／＼と肥つた力三が一番祕藏で、お末はその次ぎに大事にされて居た。二人の兄などは疎々しく取りあつかはれて居た。

父が亡くなつてからは母の様子はお末にもはつきり見える程に變つてしまつた。今まで何事につけても滅多に心の裏を見せた事のない氣丈者が、急におせつかいな愚痴っぽい機嫌買ひになつて、好き嫌ひが段々はげしくなつた。總領の鶴吉に當り散らす具合などは、お末も見て居られない位だつた。お末は愛せられて居る割合に母を好まなかつたから、時々はこのうちからもすねた事をしたり云つたりすると、母は火のやうに怒つて火箸などを取り上げて店先まで逐ひかけて来るやうな事があつた。お末は素早く逃げあふせて、他所に遊びに行つて他愛もなく日を暮して歸つて來ると、店の外に兄が出て居て待つて居たりした。茶の間では母がまた口惜し泣きをして居た。而してそれはもうお末に對してではなく、兄が家の事も碌々片づかない中に、かみさんを迎へる算段ばかりして居ると云ふやうな事を毒々しく云ひつゝ居るのだつた。かと思ふとけろつとして、お末が歸ると機嫌を取るやうな眼附きをして、夕飯前なのも構はず、店に居る力三もその又下の跛足な哲も呼び入れて、何處にしまつてあつたのか美味^{おい}しい煎餅の馳走をしてくれたりした。

それでもこの一家は近所からは羨まれる方の一家だつた。鶴さんは氣がやさしいのに働き手だから、いまに裏店から表に羽根をのすと皆んなが云つた。鶴吉は實際人の陰口にも讃め言葉にも耳を假さずにまめ／＼しく働き

つゞけた。

三

八月の三十一日は二度目の天長節だが、初めての時は諒闇でお祝ひをしなかつたからと云つて、鶴吉は一日店を休んだ。而して絶えて久しく構はないであつた家中の大掃除をやつた。普段は鶴吉のする事とさへ云へば妙にひがんで出る母も今日は氣を入れて働いた。お末や力三も面白半分朝の涼しい中にせつせと手助けをした。棚の上などを片付ける時には、まだ見た事もないものや、忘れ果てて居たものなどが、ひよつこり出て來るので、お末と力三とは塵だらけになつて隅々を尋ね廻つた。

「ほれ見ろやい、末ちゃんこんな繪本が出て來たぞ」

「それや私んだよ、力三、何處へ行つたと思つて居たよ、おくれよ」

「何、やつけえ」

と云つて力三は惡戯者らしくそれを見せびらかしながらひねくつて居る。お末はふと棚の隅から袂囊のやうな塵をかぶつたガラス壺を三本取り出した。大きな壺の一つには透明な水が這入つて居て、残りの大壺と共口の小壺とには三盆白のやうな白い粉が這入つて居た。お末はいきなり白い粉のはひつた大壺の蓋を明けて、中のものをつまんで口に入れる假爲まねをしながら、

「力三是れ御覽よ。意地悪にはやらないよ」

と云つて居ると、突然後ろで兄の鶴吉が普段にない鋭い聲を立てた。

「何をして居るんだお末、馬鹿野郎、そんなものを嘗めやがつて……嘗めたのか本當に」

あまりの權幕にお末は實を吐いて、嘗める假爲をしたんだと云つた。

「その小さい塚の方を耳の垢ほどでも嘗めて見ろ、見て居る中にくたばつて仕舞ふんだぞ、危ねえ」

「危ねえ」と云ふ時どもるやうになつて、兄は何か見えない恐ろしいものでも見つめるやうに怖い眼をして室の内を見廻した。お末も妙にぎよつとした。而してそこ／＼に踏臺から降りて、手傳ひに来てくれた姉の兒を引きとつておんぶした。

晝過ぎに力三は裏の豊平川に神棚のものを洗ひに出された。暑さがつのるにつれて働くのに厭きて來たお末はその後からついて行つた。廣い小砂利の洲の中を紫紺の帶でも捨てたやうに流れて行く水の中には、直裸かになつた子供達が遊び戯れて居た。力三はそれを見るとたまらなさ相に眼を輝かして、洗ひ物をお末に押しつけて置いたまゝ、友と呼びかはしながら水の中へ這入つて行つた。お末はお末で洗ひ物をするでもなく、川柳の小蔭に腰を据ゑて、ぎら／＼と光る河原を見やりながら、背の子に守り唄を歌つてやつて居たが、段々自分の歌に引き入れられて、ぎごちなさ相に坐つたまゝ、二人とも多愛なく眠入つてしまつた。

ほつと何かに驚かされて眼をさますと、力三が體中水にぬれたまゝで／＼光りながら、お末の前に立つて

居た。手には三四本ほど、熱し切らない胡瓜を持つて居た。

「やらうか」

「毒だよそんなものを」

然し働いた擧句、ぐつすり睡入つたお末の喉は焼け付く程乾いて居た。札幌の貧民窟と云はれるその界限で流
行り出した赤痢と云ふ恐ろしい病氣の事を薄々氣味悪くは思ひながら、お末は力三の手から眞青な胡瓜を受け取
つた。背の子も眼をさましてそれを見ると、泣きわめいて欲しがつた。

「うるさい子だよてば、ほれツ喰へ」

と云つてお末はその一つをつきつけた。力三は呑むやうにして幾本も食つた。

四

その夕方は一家珍らしく打ち揃つて賑はしい晩食を食べた。今日は母もいつになくくつろいで、姉と面白げに
世間話をしたりした。鶴吉は綺麗に片づいた茶の間を心地よげに見廻して、棚の上などに眼をやつて居たが、そ
の上に載つて居る藥壘を見ると、朝の事を思ひ出して笑ひながら、

「危いの怖いのつて、子供にはうつかりして居られやしない。お末の奴、今朝あぶなく昇汞を飲む所さ……あれ
を飲んで居て見ろ、今頃はもうお陀佛様なんだ」

とさ可愛げにお末の顔をぢつと見てくれた。お末にはそれが何とも云はれない程嬉しかつた。兄であれ誰れであれ、男から来る力を嗅ぎわけける機能の段々と熟して来るのをお末はどうする事も出来なかつた。恐ろしいものだが、うれしいものだか、兎に角強い刃向ひも出来ないやうな力が、不意に、ぶつかつて来るのだと思ふと、お末は心臓の血が急にどき／＼と湧き上つて来て、かつとはち切れるほど顔のほてるのを覺えた。さう云ふ時のお末の眼つきは鶴床の隅から隅までを春のやうにした。若しその時お末が立つて居たら、いきなり坐りこんで、哲でも居るとそれを抱きかゝへて、うるさい程頬ずりをしたり、締め附けたりして、面白いお話をしてやつた。又若し坐つて居たら、思ひ出し事でもしたやうに立ち上つて、甲斐々々しく母の手傳ひをしたり、茶の間や店の掃除をしたりした。

お末は今も兄の愛撫に遇ふと、氣もそは／＼と立ち上つた。而して姉から赤坊を受け取つて、思ひ存分頬べたを吸つてやりながら店を出た。北國の夏の夜は水をうつたやうに涼しくなつて居て、青い光をまき散らしながら夕月がぼつかりと川の向うに上りかゝつて居た。お末は何んとなく歌でも歌ひたい氣分になつていそ／＼と河原に出た。堤には月見草が處まだらに生えて居た。お末はそれを折り取つて燐のやうな蕾をながめながら、小さい聲で「旅泊の歌」を口ずさみ出した。お末は顔に似合はぬいゝ聲を持つた子だつた。

「あゝ我が父母いかにおはす」

と歌ひ終へると、花の一つがその聲にゆり起されたやうに、眠むさうな花びらをじわりと開いた。お末はそれに

興を催して歌ひつづけた。花は歌聲につれて音をたてんばかりにする／＼と咲きまさつていった。

「あゝ我がはらから誰れと遊ぶ」

ふと薄寒い感じが體の中をすつと抜けて通るやうに思ふと、お末は腹の隅にちくりと針を刺すやうな痛みを覺えた。初めは何んとも思はなかつたが、それが二度三度と續けて來ると突然今日食べた胡瓜の事を思ひ出した。

胡瓜の事を思ひ出すにつけて、赤痢の事や、今朝の昇秉の事がぐら／＼と一緒くたになつて、頭の中をかき廻したので、今までの透きとほつた氣分は滅茶苦茶にされて、力三も今時分はきつと腹痛を起して、皆んなに心配をかけて居はしないかと云ふ豫感、さては力三が胡瓜を食べた事、お末も赤坊も食べた事を苦しまぎれに白狀して居はしないかと云ふ不安にも襲はれながら、恐る／＼家に歸つて來た。と、ありがたい事には力三は平氣な顔で兄と居相撲すわりあそびか何か取つて、大きな聲で笑つて居た。お末はほつと安心して敷居を跨いだ。

然しお末の腹の痛みは治らなかつた。その中に姉の膝の上で眠入つて居た赤坊が突然けた／＼ましく泣き出した。お末は又ぎよつとしてそれを見守つた。姉が乳房を出してつき附けても飲まうとはしなかつた。家が違ふからいけないんだらうと云つて姉はそこ／＼に歸つて行つた。お末は戸口まで送つて出て、自分の腹の痛みを氣にしながら、赤坊の泣き聲が涼しい月の光の中を遠ざかつて行くのに耳をそばだてて居た。

お末は横になつてからも、何時赤痢が取つ附くかと思ふと、寢ては居られない位だつた。力三は遊び疲れて、死んだやうに眠ては居るが、何時眼をさまして腹が痛いと言ひ出すかも知れないと云ふ事まで氣をまはして、何

時までも暗い中で眼をばちくりさせて居た。

朝になつて見るとお末はやつぱり何時の間にか寢入つて居た、而して昨日の事はけろりと忘れてしまつて居た。その日の晝頃突然姉の所から赤坊が大變な下痢だと云ふ知らせが來た。孫に眼のない母は直ぐ飛んで行つた。が、その夕方可愛い、赤坊はもうこの世のものではなくなつて居た。お末は心の中で震へ上つた。而して急に力三の舉動に恐るゝ氣を附けた。

朝からぶつツとして居た力三は、夕方になつてそつと姉を風呂屋と店との小路に呼び込んだ。而して何を入れてゐるのか、一杯ふくれあがつてゐる懷ろを探つて白墨を取り出して、それではめ板に大正二年八月三十一日と繰り返して書きながら、

「己れや今朝から腹が痛くつて四度も六度もうんこに行つた。お母さんは居ないし、兄やに云へばどなられるし……末ちゃん後生だから昨日の事黙つて居ておくれ」

とおろゝ聲になつた。お末はもうどうしていゝか判らなかつた。力三も自分も明日位の中に死ぬんだと思ふと、頼みのない心細さが、ひしゝと胸に逼つて來て、力三より先きに聲を立てて泣き出した。それが兄に聞こえた。お末はそれでもその後少しも腹痛を覺えずにしまつたが、力三はどつと寢ついて猛烈な下痢に攻めさいなまれた擧句、骨と皮ばかりになつて、九月の六日には多愛なく死んでしまつた。

お末はまるで夢を見てゐるやうだつた。續けて祕藏の孫と子とに先立たれた母は、高度のヒステリーにかゝつ